記念館会報　Vol. 26　　2019. 11. 13

NPO
中帰連平和記念館
CHUKIREN HEIWAKINENKAN

「戦争遺跡保存全国シンポジウム」参加

当記念館も参加している「戦争遺跡保存全国ネットワーク」の全国シンポジウムが今年は熊本城近くの「熊本市国際交流会館」で 8 月 24、25、26 日の三日間開かれ、芹沢昇雄事務局長が参加しました。集会は熊本県と市の教育委員会が後援し、地元のＴＶ局も取材に来ていました。

参加者は 120 名余で初日は全体集会で大会実行委員長の主催者挨拶に続き、熊本市長代理の来賓挨拶の後に記念講演がありました。三日目は 2 コースに別れ「現地見学会」がありました。

記念講演は大阪大学の猪飼隆明名誉教授から「熊本城と軍都熊本」と題した講演でした。熊本城の建設から熊本鎮台の設置、西南戦争、城の焼失、軍の接収・・・」などについて 1 時間余りの講演でした。

休憩時間には有名な「クマもん」も会場に現れ雰囲気を和ませてくれました。休憩後は基調報告として「戦争遺跡保存の現状と課題」と題し、戦跡保存全国ネット共同代表の出原恵三さんからの報告があり、その後、地域報告として「熊本の戦争遺跡～現状と熊本地震から復興へ」と題し、熊本地震後の復旧状況の報告が「熊本戦跡ネット」の高井和生さんからあり、その後、会場を移し懇親会もありました。

二日目は「保存運動の現状と課題」、「調査の方法と整備技術」、「平和博物館と次世代への継承」の 3 つの分科会に分かれ、各館の報告がありました。記念館は第三分科会に参加し報告しました。各分科会ではそれぞれ 7，8 団体からの発表が発表がありました。

（「全体集会」熊本市国際交流会館）

目　　次

・「戦争遺跡保存」全国交流会参加・・・・・・1
・長坂光行・元理事逝去 ・・・・・・・・・・・・・・2
・「第 21 回 中帰連に学ぶ会」・・・・・・・・・・2
・今年も「７・７集会」開催」 ・・・・・・・・3
・「ワルシャワ大学から来館」・・・・・・・・・・3
・「神奈川県高教組」来館・・・・・・・・・・・・・・3
・「部落解放研究所」来館・・・・・・・・・・・・・・4
・「徳島大学饗場ゼミの皆さん」来館・・・・4
・連載第 19 回「記念館資料室から」・・・・4
・記念館「ブックレット」作成 ・・・・・・・・6
・「寄贈図書から」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
・「お詫び」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

記念館が参加発表した第三部会には
①「NPO 中帰連平和記念館」
②「大阪市立資料館」
③「亀島地下工場を保存する会」
④「大分県文化財保護協議会」
⑤「豊川海軍工廠跡地保存を進める会」
⑥「筑波海軍航空隊記念館」
⑦「出水市教育委員会文化財課」
の 7 団体から発表がありました。当日はその要約した「レポート集」も配布されました。各団体の発表後に質疑応答もあり、有意義な会議に参加できました。

三日目は希望者による「現地見学」は A、B の 2 コースに分かれ、A は「熊本市内の戦跡を巡る」コースで、B は「菊地飛行場と黒石原奉安殿をめぐる」コースでしたが、記念館は参加せず帰京しました。

（記念館が参加した「第三部会」）

長坂光行・元理事逝去

長い間、記念館の会計担当としてお世話にになった長坂光行・元理事が 10 月 8 日逝去（享年 86 歳）されました。

長坂さんはご自宅の八王子から川越の記念館まで毎月 2 回車で通って下さいました。

長坂さんは大変温和な優しい人でした。記念館から松村髙夫理事長名で弔電と、葬儀には芹沢事務局長と宮本司書が参列させて頂きました。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。長坂さん有難う御座いました。

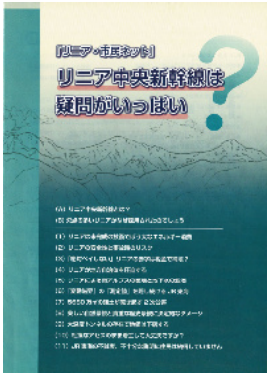
第２１回「中帰連に学ぶ会」

慶応大学名誉教授の川村晃生先生から、松村理事長経由で「記念館を訪問したい」との要望が届きました。折角、山梨から来館下さるなら「ストップリニア訴訟」原告団長や、「リニア市民ネット山梨」代表もされてる先生に講演をお願いしました。7 月 24 日に来館して講演頂き 20 名余が参加しました。

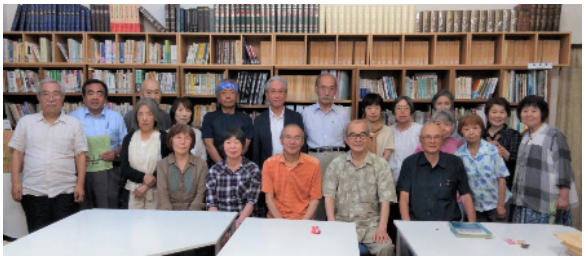
講演のタイトルは『暴走するリニア新幹線』と題して 2 時間余の講演の後、質疑応答にも応じて頂きました。

リニア新幹線とは何かの後、問題点としてエネルギー、安全性、経済性、自然破壊、生活環境破壊、電磁波、住民理解の話がありました。

そして、反対運動の流れとして、1 都 6 県の地域運動、地域運動の結集から訴訟への話がありました。その訴訟の中身として、1「ストップリニア！訴訟（リニア新幹線沿線住民ネットワーク）、2「子ども巻き込むな！リニアまんが訴訟（山梨県）、3「リニア差し止め訴訟」（山梨県）の 3 つの訴訟について話がありました。



他にも財政投融資問題として「リニアは民間事業か公共事業なのか」、談合事件の発覚やリニア新幹線の行方について、完成の可能性や未着工の静岡工区の見通しなどについても講演頂きました。



（「中帰連に学ぶ会」参加の皆さん）

今年も「７・７集会」開催

７月７日は「七夕」と知っていても、日中全面戦争のキッカケの「盧溝橋事件」の起きた日と知る人はもう多くはないかもしれません。

長い間､元軍人４団体が毎年開いていた｢７・７集会｣は､今も後継４団体の「日中友好 8・15 の会、不戦兵士・市民の会、撫順の奇蹟を受け継ぐ会、日中平和友好会」が引継いで今年も７月７日に開催しました。

今年も中国大使館の後援も戴き「さいたま市産業文化センター」で開催し 150 人余りが参加ました。

第１部では４団体の代表から近況報告・挨拶があり、後援の中国大使館からも楊宇参事官からご挨拶がありました。

第２部は「７・７事件から戦争の実相を考える」のテーマで纐纈厚（こうけつ あつし）先生（前山口大学理事兼副学長、明治大学特任教授、政治学博士）から下記の約１時間余りの講演があり、その後 30 分余りの質疑応答がありました。

内容は下記のテーマについて講演されました。

① 戦前日本国家とは何だったのか。
② 日中戦争の位置。
③ アジア太平洋戦争とは何だっのか。
④ 戦前と戦後の連続性。
⑤ 戦前回帰の向こうに何を。
⑥ 「戦争のできる国」にして良いのですか。

ワルシャワ大学から来館

ワルシャワ大学のスタレツカ・カタジナ博士が 8 月 28 に来館下さいました。博士は一ヶ月の予定で来日中とのことでした。

東大や大阪外大に留学した経験があり、日本語は非常に堪能の先生でした。

中帰連のことは論文も書いており、殆どご承知なので館内の資料を見て頂いたり。パソコンで写真を見ていただきながら、記念館の経緯や現状などをお話ししました。

2 時間ほどの滞在の後、ご要望で埼玉県平和資料館と丸木美術館をご案内しました。

丸木美術館に「南京大虐殺、アウシュビッツ、水俣」の大きな絵があるのは知らず感謝されました。

尚、県資料館では過日年表にあった南京大虐殺や従軍慰安婦の写真や表記が削除されていることも説明しました。

（カタジナ博士と宮本司書）

「神奈川県高教組」来館

神奈川県高教組の皆さん 8 人が 7 月 13 日来館されました。その中のお一人は過日も来観下さり、その時は同教組の会報『かながわ平和通信』にも「中帰連平和記念館」を紹介下さいました

途中渋滞で少し遅れ 11 時過ぎに到着し、最初に芹沢事務局長がパワーポイントで資料をスクリーンに映し 1 時間ほど中帰連の証言・体験などを紹介しました。その後、30 年前のＮＨＫ映像『戦犯たちの告白』（45 分）を観て戴き、その後、質疑応答や館内案内をしました。

その後、持参の昼食を摂り高速で 30 分程の「原爆の図・丸木美術館」に向かいました。皆さんとても熱心でカンパまで戴き、また私たち事務局メンバーの昼食までご持参下さり

有難う御座いました。

（「神奈川県高教組」の皆さん）

「部落解放研究所」から来館

7 月 27 日、都内の「東日本部落解放研究所」の井桁碧理事長、解放出版社の村井浩司さんなど 4 人が来館下さいました。

皆さん「中帰連」に関心を持って下さり、感心して説明をお聞き頂き有難う御座いました。

（「部落解放研究所」などの皆さん）

徳島大学「饗場ゼミ」の皆さん来館

過日ご来館下さった徳島大学の饗場先生が、改めて 9 月 24 日にゼミ学生 6 人を同行しご来館下さいました。

10 時半過ぎに到着し、中帰連や記念館の説明や映像など観て、質疑応答なども含め 3 時近くまでゆっくり滞在頂きました。

折角遠方からご来館なので、その後、電車で 10 分ほどの城下町・川越旧市街の「蔵の街」などもご案内しました。学生さんは都会が珍しいようで、女子大生はファッションや食べものにも関心があるようでした。また電車の編成（10 両）が長いとビックリしていました。

二日目は「原爆の図・丸木美術館」をご案内しました。学生さんたちは初めてとのことで、思っていたより絵が大きかったとの感想でした。また「アウシュビッツ、水俣、南京大虐殺」の大きな絵があるのも知らなかったようです。丸木夫妻の川の見える落ち着いた「アトリエ」もお気に入りのようでした。その後、反面教師として「埼玉県平和資料館」をご案内しました。此処は、過日、南京大逆殺の写真を削除したり、「従軍慰安婦」の表記を書き換えたりの経緯があり、加害や責任、原因などには触れていません。

若い学生さんが遠方から来館下さったことに感謝と御礼を申し上げます。（「鐘撞き堂」川越）

（饗場教授と学生さん）

連載　記念館資料室から
第19回　中国からの訪日団が接した中帰連
石田隆至（「中帰連に学ぶ会」事務局）

『前へ前へ』第 9 号は 1958 年に入り、1 月 25 日の発行です。

40 ページ以上とますます充実した内容で、

前半は年末に来日した中国紅十字会代表団の全国規模での歓迎の様子のレポートで占められています。これほど大きな紙面を割いて報告されたのは、中帰連の人々にとって同会が特別な存在だったからです。同会会長の李徳全は 1954 年にも来日しており、撫順と太原の戦犯管理所に抑留中の戦犯名簿を発表していました。戦犯の家族らはそれで初めて安否を知ることができたのです。管理所では戦犯たちが認罪運動を終えたばかりの頃でした。

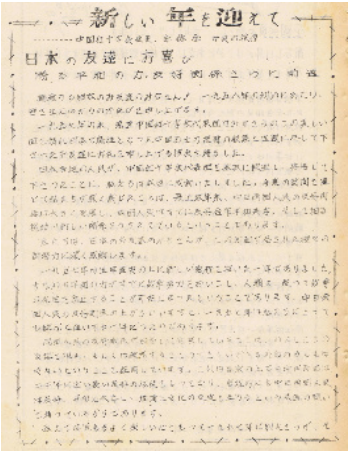
今回の訪日は、戦犯たちが帰国して 1 年あまり経った段階でした。前回までに紹介してきた通り、彼らは日本社会に復帰する上で大変な苦労を重ねただけに、管理所での経験がいかに有り難く、特別なものだったか、実感を深めていたタイミングでした。国交のない時代で訪日実現が何度も延期されたこともあり、**「あふれる感激の涙」**が各地で流されました。

会員の多い東京では家族を含めて 124 名が歓迎行事に参加したのをはじめ、北海道、青森、秋田花岡、愛知、岐阜、大阪、下関、岩国、福岡、南九州、岡山の各支部からの歓迎レポートが掲載されています。秋田や愛知では普段あまり名前の出ない会員も駆け付け、岐阜では支部のほとんどのメンバーが参加しました。岡山で農業に従事する日下寛丈の感慨が、会員の思いを象徴しています。**「生みの母親か姉さんかに二十年も三十年も会うことが出来ず久振りに会ったような気持、何時までもそばを離れたくありませんでした」**。中帰連から紅十字会に贈られた**「記念アルバムは特大型でブルー色の上等の布の上に金文字で『釈放戦犯帰国後の生活写真集』李徳全女史訪日記念、1957年、中国帰還者連絡会、の文字がおしてあります。厚さ80ページ、写真約900枚」**という点からも、全国の会員の関心の高さが窺われます。

紅十字会は中国人強制連行・強制労働被害者の慰霊・遺骨返還の一環で来日していましたので、歓迎委員会は複数の日中友好団体から構成されました。中帰連からは、児玉華子と稲葉績が事務局員として活躍しました。児玉は 2 名の女性戦犯（太原組）の一人で、流暢な中国語を活かして通訳として貢献しました。彼女は、元戦犯と紅十字会との繋がりの特別さをこう表現しています。**「釈放後天津に於て盛大な晩さん会を催して我々の前途を祝して下さった紅十字会の諸先生、天津の新港より新しい人生の船出を見送って下さった紅十字会の倪先生に再びお目にかかれたよろこび・・・」**。また、代表団の一員である彭炎が児玉に語った内容も印象的です。**「今度の訪日で一番感激したのは、各地方で皆さんにお会いして、とても明るく、一番心配していたが、ひねくれないで生活し非常に健康的であり…、」**。帰国した戦犯たちが屈折することなく真っ直ぐ歩むことができているのかまで、心配していたのです！

もう一人の事務局員の稲葉は、代表団が各地で中帰連会員に会う度に、家庭状況、経済力、就職などについて事細かに尋ね、励ましていることを感動をもって伝えています。苦労しながら奮闘を続ける中帰連会員の様子を聴いた代表団は**「団結と相互援助は必ず大切な事です」**と激励し、中帰連の歩みを全面的に肯定しています〔なお、稲葉さんは現在も 90 歳を越えて、お元気です！〕。

会報の後半は、前年 9 月の第一回全国大会の決議を受けて、相互援助をどう具体化、深化させるかをめぐり、各支部で開かれた総会の模様が記されています。北海道支部、鹿児島支部、福島支部の支部報が紹介され、鹿児島と福島では行政との具体的な折衝の模様が報告されています。北海道では、まだ就職が決まらない会員もいるなか、家族を含めて 12 名が大河原孝一支部長の下に集い、結婚や就職の面で会員同士の協力・援助が進んでいることが報告されています。佐藤静雄は、全国大会の様子を知って**「一層勇気づけられた」**と同時に、**「私はこのような会合が年一度あることは本当に楽しみでもあり、いろいろと明日から**


新しい年を迎えて

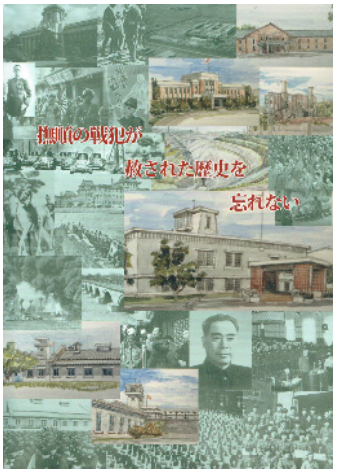
日本の友達に贈る

何をすればよいのかということまでも分かることができるような気がするのです。私達は中国で一生涯変わらぬ固い誓いをみんなでやってきましたね。それを忘れずに、また近い将来に大きな希望をもって朗らかに生活できることを信じつつ・・・」と感激を記しています。相互援助については、今後の号でより詳しく確認していきたいと思います。

記念館「ブックレット」作成

この度、記念館では「中帰連」を紹介するブックレット『撫順の戦犯が許された歴史を忘れない』を作成しました。

中帰連の皆さんの戦争体験から、戦犯として撫順、太原の戦犯管理所に収容され人道的に扱われ認罪していった経過など写真入りで示しています。



また帰国後の困難な生活のなかで、中帰連を立上げましたが、その後、一時分裂し再統一した歴史もありました。

中帰連が如何なる体験をし、如何なる人生を送ったのか解ります。既に皆様鬼籍に入られましたが、是非「中帰連」の人生を知って欲しいと思います。

ご希望の方は記念館までご連絡ください。
（送料込 500 円、全頁カラー、B5 版、28 頁）

◆寄贈図書から

著者：青木茂
（A5 版　247 頁
出版：花伝社）

「万人坑」とは日本軍が中国人を大量に殺した「人捨て場」です。市民 3000 人が殺された「平頂山」もその 1 カ所です。

『見ない、言わない、聞かない
徴用工、慰安婦の戦争犯罪』
（絵・橋本勝）

お　詫　び

当記念館の担当で 10 月 26、27 日に県内の国立女性教育会館で「平和のための博物館ネットワーク」全国交流会が開かれ、またそれに合わせて記念館の『ブックレット』の作成などで会報の発行が遅れましたことをお詫び致します。内容は次号でお知らせ致します。

『NPO 中帰連平和記念館』

〒 350-1175 埼玉県川越市笠幡 1948-6
TEL&FAX：０４９－２３６－４７１１
E-mail：npo-kinenkan@nifty.com
ＨＰ：http://npo-chuukiren.jimdo.com/
ＭＬ：npo-kinenkan@freeml.com
郵便振込口座名「NPO 中帰連平和記念館」
振込口座　：００１５０－６－３１５９１８
開館日：「水、土、日」（10:30 ～ 16:30）
（ご来館はなるべく事前にご連絡下さい）